画境ということ

眞鍋呉夫

少年時代以来、猿飛佐助やチャップリンの熱心なファンである私は、たとえばメキシコ近代絵画の強手であるシケイロスについての、次のような話がたいそう好きだ。すなわち、酒とバクチと美人に弱いメキシコの民衆によると物情騒然たる当時のメキシコシティに雌伏していた若き日のシケイロスは、金がなくなるとピストルを連射して、そのタマでアトリエの天井に絵を描いたという。また金がある時にはモーターを据えつけて、樽のようなチューブから絵具をひねりだしたという。

断っておくが、私がこの話を好きなのは、かならずしもそれが威勢がいいからではない。いや、その点について云えば、私はむしろ臆病者の部類に属している。ではなぜこういう話が